



朝に仰ぐ²⁰²⁴

志高く、自ら考え、たくましく未来を拓く児童の育成

気仙沼市立津谷小学校

校長 菅原 理恵

発行日 令和6年12月23日（月）

育ての心

冬休み前講話朝会を終え、明日から冬休みです。今日は冬休み前の最終登校日ということで、どの学級でも長期休業前の様々な活動に取り組んでいました。気持ちよく新年を迎えられるように…と片付けや清掃にいつも以上にしっかり取り組んだり、講話朝会を振り返って夏休み終了から4ヶ月間頑張ったことや成長したことを振り返ったり、冬休みの読書のために図書室から本を借りたり、学級で楽しい会をしたり…と各学級それぞれに冬休み前の大切な1日を充実させて過ごしていました。この最後の1日が子供たちにとっても教師や保護者の皆様にとっても実はとても大切です。体調を崩すなどして欠席したお子さんには、担任からの話をぜひお子さんに伝えてください。本日の講話朝会で話したことは、「学校便り『かけはし』」にありますので、そちらを御覧ください。子供たちや私達教職員にとってとても充実し、成長した4ヶ月でした。「かけはし」にも書きましたが、この頃、子供たちにお互いを尊重し合ったり、リスペクトし合ったりする姿が多く見られます。そのたびに心が温かくなってとても嬉しい気持ちになります。



以前にも紹介したことがあります。私が宮城教育大学附属幼稚園に勤務していた頃、「日本のフレーベル」と呼ばれる、旧東京女子師範師範学校（現お茶の水女子大学）教授で附属幼稚園主事（初代園長）の倉橋惣三先生の「育ての心」という本と出会いました。その中の一節が次のとおりです。

自ら育つものを育てようとする心、それが育ての心である。世にこんな楽しい心があろうか。それは明るい世界である。温かい世界である。育つものと育てるものとが、互いに結びつきに於て相楽しんでいる心である。

育ての心。そこには何の強要もない。無理もない。育つものの偉（おお）きな力を信頼し、敬重して、その発達の途に遵（したが）うて発達を成し遂げしめようとする。役目でもなく、義務でもなく、誰の心にも動く真情である。

しかも、この真情が最も深く動くのは親である。次いで幼き子等の教育者である。そこには抱く我が子の成育がある。日々に相触る子等の生活がある。斯（こ）うも自ら育とうとするものを前にして、育てずしてはいられなくなる心、それが親と教育者の最も貴い育ての心である。

それにしても、育ての心は相手を育てるばかりではない。それによって自分も育てられてゆくのである。我が子を育てて自ら育つ親、子等を育てて自らの心も育つ教育者。育ての心は子どものためばかりではない。親と教育者とを育てる心である。

子供たちによく話していたことに、「よく遊び よく学べ」や「挑戦」と「全力」そして「努力」があります。夏休み終了後の「新しい津谷小学校」の4ヶ月で、津谷っ子たちは見事にその姿を見せられました。子供たちの成長に毎日が「感動」の日々でした。大きな事故やけがもなく子供たちの成長を見つめ感動することができたこと、子供たちの成長をとおして私達教職員も自らの成長を実感することができたこと、保護者の皆様や御家族の皆様、そして地域の皆様と手を携えてお互いに励まし合いリスペクトし合いながら子供たちの成長を育むことができたことがまさにこの「育ての心」だったと思います。「津谷小学校をもっとよくするアンケート」や各種行事での保護者の皆様からの温かな感想は、どんなに疲れていても私達教職員を元気にしてくれました。今日は子供たちにも頑張ったことを聞いて「頑張ったね」と褒めてあげてください。よく「教育はお互い」と言われます。ときには共に喜び、ときには共に悩みながら、これからも子供たちのより良い成長を御一緒に促していくことができればと思います。たくさんの御支援や御協力をありがとうございました。令和7年もどうぞよろしくお願いいたします。



皆様、良いお年をお迎えください。